ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.5 May 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

・巻頭言
「元初まりの話」の読まれ方・その２
／井上　昭洋 1

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（31）
先住民の災害避難と移住
／山西　弘朗 2

・教内の福祉の歴史（３）
（続）歴史および歴史学について
／松原　浩一郎 3

・日本占領期の香港―植民地研究の視点から―（９）
香港軍政庁の設置と占領統治方針
／山本　和行 4

・ブラジルの宗教的風景（12）
アンテベラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑥
／中西　光一 5

・2025 年度公開教学講座：「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて（11）
第 11 講：「元の理」のジェンダー（論）
／堀内　みどり 6

・おやさと研究所ニュース 7
第 384 回研究報告会（１月 16 日）／第 385 回研究報告会（２月 18 日）／2025 年度宗教研究会兼伝道研究会を開催（２月 27 日）／2026 年度公開教学講座のご案内／新刊紹介

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その２

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

その昔、大学院のゼミが終わって「何でもいいので美味しいものが無性に食べたいけど、何が食べたいのか分からない。」と呟くと、それを聞いていた教授が「井上君、食と性はメタフォリカルに強く結びついているのですよ。ホーホッホ。」と笑いながら返してきたので、赤面したことを思い出す。ホール＆オーツの「Maneater」という曲がヒットした 80 年代の頃の話である。教授の発言を待つまでもなく、「あなたを食べちゃいたい」「女／男に飢える」といった常套句に見るように、食べることと交わることとの間には強い隠喩的な関係がある。もとより、食べること・交わることは、生きることの根幹であり、人間の存続にとって不可欠な営みである。だとすれば、人間の起源を語る創世神話もまた、この二つの営みと無縁ではいられないはずだ。

神話のなかで語られる最も大きなテーマは「生」と「死」であるが、「生」を支えるのは食であり性である。そのうちの「性」を軸に据えて創世神話について示唆深い考察をしているのが赤坂憲雄である。[1] 彼は、中村桂子の『生命誌とは何か』[2] を手がかりに、『古事記』の新たな読解を試みる。中村によれば、単細胞生物は無性生殖によるコピーで増え、「死のない生命」を生きるが、多細胞生物は有性生殖によって遺伝的に新たな個体を生み出す一方、個体の死を抱え込む。つまり「死」は「性」との組み合わせで登場したのだという。赤坂は、この「性」を介在させる視点から、『古事記』の創世神話を解釈するが、その補助線として天理教の創世説話が登場する。

「神話は泥の海を欲望する」という魅惑的なタイトルで始まるその節で、赤坂は『おふでさき』を手がかりに天理教の創世説話を「『古事記』のイザナキ・イザナミ神話を淡く下敷きにしながら、民俗的な奇想と変容（メタモルフォーゼ）を施した神話」と捉える。そして続く「オノゴロ島にて、聖なる結婚と死」では、中村の「生命誌」が語る生命の歴史物語（Biohistory）と重ね合わせて『古事記』の神々の物語を読み解いていく。

『古事記』の上巻では、造化三神（ぞうかさんしん）に始まる独神（ひとりがみ）の時代から、男女対偶神の時代に移行する。独神とは性を持たず、現し身を隠すものの、死ぬことのない象徴的な存在である。一方、対偶神として登場するイザナキとイザナミは、聖なる交わりによって国産みをし、神産みにいたるが、イザナミは火の神カグツチを産んだ後に死ぬ。赤坂は、この移行に生命の歴史物語を大胆に見て取る。独神の時代は単細胞・無性生殖で「死」が不在の段階に、イザナキ・イザナミの時代は多細胞・有性生殖で「死」が誕生した段階に、それぞれ対応するというのだ。

赤坂は、親神が泥の海よりうをとみを引き出して、それぞれにいざなぎといざなみの神名を与え、「夫婦としての交わり」を教えたと、天理教の創世説話をまとめる。ただし、彼が参照するのは『おふでさき』の当該箇所のみで、「元初まりの話」において親神が水棲動物を引き寄せて食し、神名と役割を与えている点を見落としている。『古事記』と異なり「性」だけでなく「食」をも創世の営みとして描く「元初まりの話」について、「こふき本」まで遡ってテクストを読み込んだ益田（前号巻頭言）と、『おふでさき』のみを参照した赤坂とでは、解釈に差が生じるのは当然であろう。「元初まりの話」を古代日本の神話的想像力が『古事記』とは異なる形で表出したものと捉えた益田と、それを『古事記』の民俗的変容と捉える赤坂との間には、僅かだが見逃せない差がある。

［註］

（１）赤坂憲雄（2017）「第五章　はじまりの神話」『性食考』岩波書店、151 ～ 182 頁。

（２）中村桂子（2014）『生命誌とは何か』講談社学術文庫。